

報告1 シャンティ国際ボランティア会の学校外教育

―事例から

三宅 隆史



サラーム・アレイコム（ダリ語で「こんにちは」）。シャンティ国際ボランティア会（SVA）の三宅と申します。本日はお招きありがとうございます。笹井先生からは成人のノンフォーマル教育についてのお話でしたが、私からは子どものノンフォーマル教育について、ナンガハール州ジャララバードで実施している私たちのプロジェクトをご紹介します。

SVAは1981年に設立されました。2003年からナンガハール州で教育開発と教育協力の事業を行っております。活動として学校建設事業、学校図書室改善事業、子ども図書館事業を展開してきております。

（1）ジャララバードの子どもたち



*子どもの権利条約…「児童の権利に関する条約」（児童とは18歳未満）。子どもの基本的な人権を国際的に保障するための条約。1989年の国連総会で採択され翌年発効。生きる権利・育つ権利・参加する権利・守られる権利（差別・虐待・搾取から）の4つの権利を柱としている。

ジャララバード市は、カブールの東側、パキスタン国境にある地域で、パシュトゥーンの人たちが主に居住しています（図1）。ジャララバードの子どもの問題（図2）としては、第1に、不就学つまり学校に行けない子どもがたくさんいることが挙げられます。アフガニスタン全体に共通する問題ではありますが、ジャララバードでは8万人の内1万人の子どもが学校に行っていません。背景には貧困故の児童労働があります。

第2に、文化や余暇の機会が不足していることです。子どもの発達において、学校で知識を学ぶ一方で「遊ぶ」ということもなくてはなりません。文化に接し、余暇を持つことが必要ですし、本を読む機会も必要です。文化や余暇の権利は「子どもの権利条約」にも規定されています。しかし、ジャララバードには子どもの図書館も、児童館にあたるものもありません。

ここ数年、治安状況が非常に悪くなっています。たとえば、ジャララバード市内では23店のCDショップがアフガニスタンの楽曲を売っていましたが、反政府武装勢力によって数店が放火されてしまい、残りの店も全部閉店してしまいました。もともとアフガニスタンには素晴らしい民族音楽があつて、それを演奏するグループが結婚式とか家庭でのパーティーなどに呼ばれて楽器を持ち込んで演奏し、皆で楽しむことが

*タラナ…詩の朗読の一種。

*アタン…パシウトウーン族の踊りで、アフガニスタンの伝統舞踊。娯楽と文化を否定するタリバーンの支配下で音楽・舞踊・遊びが禁止されていたため、アタンの伝承も途絶えたと言われる。

*ブルカ…伝統的にイスラム世界の都市で用いられた女性のベール的一种。顔の部分だけが網目状になっているテントのような布で全身を覆う。

図2

ジャララバード市の 子どもの教育の課題

1. 不就学
 - 1万人の子どもが不就学←貧困、児童労働
2. 文化、余暇、読書の機会不足
 - 図書館、児童館なし
 - 市内のCDショップ閉店、音楽グループへの襲撃
3. 女子の意見表明、参加の機会不足

よくあります。私がアフガニスタンに行くと、スタッフがそういう会を開いてくれたりしますが、この楽人たちも襲撃されるという事件も起きています。ですから、歌舞音曲といったものを表立って楽しめないのです。アフガニスタンの子どもたちも、女の子がタラナを朗誦したり、男の子もアタンという伝統舞踊で楽しむような習慣があるのですが、今はそれもできなくなってしまつて、伝承が中断しています。

子どもの時に伝統文化に触れるとか、思いつき楽しく遊ぶという経験は本当に大事です。伝統文化を体験しているかそうでないかは、大人になってからすごく影響が出てくると思います。ですから、そういった機会は是非とも提供される必要があるのです。

第3には、特に女子の問題です。アフガニスタンでは、女の子は初潮が始まると、外出しにくくなります。親に言わせると女の子を守るためだということなのですが、女性が人の前で話をしたり、ブルカを被らずにおおっぴらに一人で外を歩いたりすることは、現状では非常に難しい社会なのです。ですから、女性が子どもの時期にエンパワーメントを体験しておくことが、女性の地位向上のために非常に重要だと思っています。

*エンパワーメント…自分で意思決定し、行動できる能力。

図3



図4



(2) 子どもたちに本を！ 子ども図書館を拠点とした文化活動

こうした子どもたちのために、とにかく本が必要です。私たちは2003年から本を作っています(図3)。ナンガハール大学教育学部の先生や作家といった人たちと一緒に出版委員会を構成して、絵本61タイトルをパシュトゥー語とダリ語で作りました。多くは民話を原作としています。他に紙芝居14タイトルを作って学校や公共図書館に配布しています。

参考に皆さんにお話しするのは、私たちが作った絵本の一冊で(図4)、これはお爺さんを背負っている絵ですが、日本の「姨捨て山」と同じようなおはなしです。最後は後悔して里へ戻っていく話ですね。民話にはよい話がたくさんあります。子どもたちも親から聞いて知っている話だと積極的に読みたいと思うのです。それが結果として文字を覚えていくことになるわけです。絵本というのは、知識だけではなくて解語態度や価値の発達にもポジティブな影響を与えるものだと思います。

図 5



図 6



ここで、SVAが展開する子ども図書館がどのようなものかについて説明します。建物は民家を借りて図書館としていますので、外から見ると普通の家です。その上、これがジャララバード市のどこにあるかは秘密になっています。というのは、2005年に米国兵士がコーランを焼いたためにアフガニスタン全土で暴動が起きた際、ジャララバードにある国連機関の事務所はすべて焼き討ちに遭いましたので、NGOのオフィスでも看板は掲げないようにしているのです。人目につきにくい方が危なくないからです。

*NGO：(Non-Governmental Organizations) 非政府組織。軍縮や飢餓救済、環境保護などの問題に関する活動を行う非営利の民間組織。

子ども図書館(図5)には3千冊程度の本を置いてあり、子どもたちは自由に読むことができます。また、本を置いていくだけでは子どもたちは読みませんから、先生が読み聞かせをします。図6は『大きなカブ』を読んでいるところです。お絵描き(図7)や、縫製(ミシン)の教室もあります(図8)。ミシンは女の子だけではなく男の子も喜んでというか、頑張つてというか、楽しんでやっています。あまりお金にはなりません、受注したものを作って売り、それで材料費を稼ぐこともします。図9はビーズを使った小物の工作です。



図
7



図
8



図
9



図
10

その他に、行事としてお誕生日会を3カ月に一度まとめて開きます。自分が生まれた日を大切にすることは日本では当たり前ですけれども、アフガニスタンでは出生届の制度が完備していませんので自分の誕生日を知らない子どもが結構います。子どもたちは「私の誕生日はいつ?」と親に聞くことで、自分の誕生日を知ります。お誕生日会にはケーキを食べたりして嬉しい日にします(図10)。こうすることで自分が生まれてきて良かったと思ってもらいたいです。



図 11



図 12



図 13



図 14

また、アフガニスタンの独立記念日などには、それに合わせた催しをします。たとえば、3月8日の国際女性の日には、子どもたちがアフガニスタンの女性について、自分たちで作った劇を演じたり（図11）、詩の朗読（タラナ）をします（図12）。こうした行事を毎月1度行っています。行事にはお母さんたちもやって来て、自分の子どもが人形劇をしたり、歌を歌ったりするのを観ることができます。図13で左側にいるのはお母さんです。お母さん同志が集まる保護者会も開いています（図



*カウンタートパート…国際協力や国際的な共同作業などを行う際、現地での受け入れを担当する人や機関を指す。語意は「対等な対応相手」。

14)。お母さん方はこういう機会を非常に楽しみにしています。

子ども図書館では、学校に行きたいのに行けない子どものために特別教室も開いています。50人を対象にして主に文字の読み書きなどを教えます。昨年は小学校5年生クラスの授業をしました(図15)。

以上を整理しますと、私たちの活動の目標は、アフガニスタンの子どもたちが読書や文化活動の機会を得られるようにすることです。したがって、子ども図書館の具体的活動は、図書館運営だけではなく、文化活動、月

図16

目標、活動、体制、予算

目標:子どもが読書、文化活動の機会を得る。

活動:

1. 図書活動
蔵書、3,000冊、年間290日開館、貸し出し、読み聞かせ
2. 文化活動
縫製、ゲーム、遊び、お絵かき、詩、(踊り、音楽)
3. 月例行事
記念日(母の日、女性の日、独立記念日)、誕生日
4. 不就学児童のための特別教室

体制: スタッフ1名(常勤)、教員・図書館員6名(非常勤、4名女性)、SVAの直営、情報文化局から職員出向

予算: 32,000ドル(直接人件費含む)

例行事、不就学児童のための特別教室を行っています(図16)。会のスタッフ1人と、非常勤契約の現地の先生6人(うち女性2人)で運営していますので、実際には私たちSVAの直接運営ですが、先生の1人は州政府の情報文化局からの出向者ですので、*カウンタートパートになります。経費は年間約3万2千ドルです。

成果(2011年)

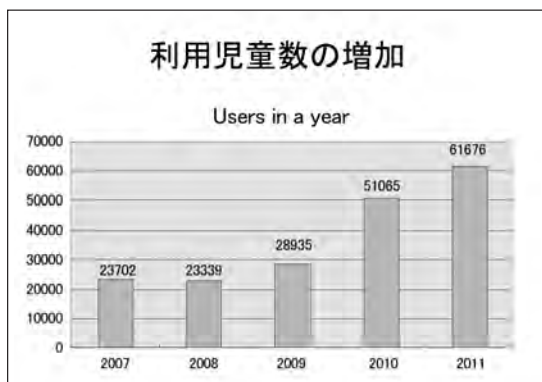
- 利用者数
 - 年間61,676名、292日開館、1日あたり211名、女子が50%
- 図書貸出数
 - 1カ月平均602冊
- 不就学児童の特別教室(5年生クラス)
 - 50名就学、34名修了、8名が公立小学校6年生に編入。
- 子どもの意見表明、参加の機会

(3) 活動の成果

昨年の成果としては(図17)、図書室利用者が約6万人でした。年間292日開室していますので1日当たり200人ぐらいが利用していることになります。利用者の半分が女子です。図書の貸出数は1カ月で約600冊です。

不就学児のための特別クラスにつきましたは、50名入学して34名が修了しました。修了できなかった子どもたちは、引越したとか、やはり家の仕事を手伝わなければならないといった事情によるものです。34名の修了生のうち、公立学校への編入ができたのは8名だけでした。

図18は図書室を利用した児童数の推移です。データは2007年からのものですが、毎年増えています。利用者の年齢は、3歳から15歳まで

図
18

＊WHO: (World Health Organization) 世界保健機関。人間の健康を基本的な人権の一つと捉え、その達成を目的として設立された国際連合の専門機関。WHOにおける健康の定義は「完全な肉体的、精神的及び社会福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」(憲章前文)となっている。

図 20

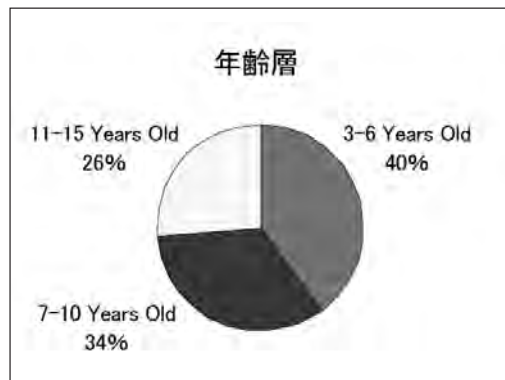


ですが、3歳～6歳、7歳～10歳、11歳～15歳、といった年齢層がそれぞれ3分の1くらいずつとなっています(図19)。

この活動を特に子どもに対する学校教育の意義(図20)に照らしてみますと、いわゆるライフスキルの発達に對して非常にインパクトがあると思っております。

WHOの定義には、子どもに對するプログラムとして、「意志決定、創造的志向、コミュニケーション、自己認識、ストレスへの対処、共感、対人関係、批判的志向、問題解決」という9つの能力というか、行動様式が挙げられています。私たちの活動は、子どもたちのこうした能力を守る上で、力を發揮しているのではないかと考えております。

図 19



課題

・ 自立発展性

- 政策: 公共図書館での児童図書サービス
- 制度: 十州に4図書館あり、全国で増加傾向
- 財政: コスト高、行政負担? 複製不可能
住民、受益者負担?
- 技術: 情報文化局に1名

・ 方向性

- ① 終了
- ② 規模縮小して直営で継続
- ③ 公共図書館に機能を移転し、情報文化局が継続

(4) 課題と今後の方向性 (図 21)

最後に課題ですが、お気づきの通り、規模が小さいということと、自立発展性というのが大きな問題です。政策面では情報文化省は、公共図書館をどんどん設置していて、ナンガハル州にも現在4館の公共図書館ができています。ただ、子ども用のサービスはないので、私たちはそのサービスを始めるようにという働きかけをしております。昨年、公共図書館4館に児童図書コーナーを設置しました。別に司書は配置されていますので、子どもに対するサービスもできるようになるだろうと思います。

一方、資金面で問題があります。年間3万ドルという経費を行政が全部負担することは、やはりまだまだ難しいのです。いわゆるレプリカビリティ(再現可能性)が低いので、政府が行うという状況にはなっていません。私としては、住民が負担するという考えも持つてはいるのですが、NGOの事務所が爆破されるような不穏な社会情勢の中で、秘密のような形で子ども図書館を運営している現在は、以前には開いていたアタンの教室も閉鎖しているような状況ですので難しいかなと思います。

ご清聴ありがとうございました。

*コンピテンシー:(competency) 単なる知識、思考力、資格や偏差値等の能力とは異なり、ある職務や状況において、期待される成果を安定的・継続的に達成している人材に一貫して見られる行動・態度・思考・判断・選択などにおける傾向や特性。

丸山…ありがとうございます。三宅さんからは、特に学齢期の女子への支援を重視した活動の様子を伺いました。

笹井さんのお話でも*コンピテンシーに触れておりましたが、教育学の観点から申しますと、学校外教育の特徴として三宅さんが挙げられた内容は、ほとんど教育そのものが追いかけている目標であったり、また、ゴールであったりするのではないかと思います。

では、引き続きまして、小荒井さんに「アフガニスタンの識字教育の現状と課題」についてお話しいただきます。よろしく願います。

